

「見」字再考

松尾善弘

(一九八四年九月十五日 受理)

一 「百里見秋毫」の解釈について

秋の末つかた、鷹狩に随行して作った「観放白鷹(二首)」と題する李白の詩その一は次のようである。

八月辺風高 八月 辺風高し
胡鷹白錦毛 胡鷹 白錦毛
孤飛一片雪 孤飛す一片の雪
百里見秋毫 百里 秋毫見ゆ

高・毛・毫を下平四の豪の韻で踏む仄起式の五言絶句である。いま、この詩の解釈を手許にある三種の本で調べてみた。

A 『李太白詩集(下)』統国訳漢文大成

八月秋の半に於て、辺地は北風高く吹きすぎ、胡地に産する白鷹は、錦毛愈よ麗はしく、まことに俊姿颯爽といふべき程である。これを放てば、一片の雪が孤飛するが如く、そして、白鷹は、眼界百里に亘つて、秋毫の末までも見透し、決して獲物を逃がすまいといふ意気込みである。(傍点筆者)

〔余論〕前半は、白鷹その物を写し、後半は、これを放った時を写

し、全首を通じて、その姿態、さながら見るが如くである。

B 『李白(上)』武部利男注 中国詩人選集

八月には国境の風が空高く吹く。えびすの地に産する鷹は、白色で、もようのある毛がうつくしい。これを放つと、ひとり飛びゆき、さながら一片の雪のようだ。百里先まで行っても毛のこまかいところまで見える。

C 『李太白詩歌全解』大野実之助著 早稲田大学出版部

秋の半ば頃八月となって国辺の地方には北風が高く吹き渡って、胡地に産した鷹は白色の錦毛いよいよ鮮明となって美しい。その鷹が一羽で飛び獲物を追う姿はあたかも一片の雪が飛散するように見え、百里の遠いところを飛んでいても秋毫の末まで明瞭に識別できるほどである。

結句の「百里見秋毫」に注目しつつ三者の解釈を比較してみると、Aでは、百里も遠くはなれたところから秋毫を見るのは白鷹である。つまり、この句の文法構造を、「白鷹(主語) 百里見秋毫(目的語)」ととらえている。B・Cでは、百里離れたところから見ているのは作者李白であり、秋毫は白鷹のそれである。すなわち、その文法構造は、「我(李白) 百里見秋毫」という動賓構造になる。因みに「秋毫」の語釈は、A、極めて微細なるものに譬ふ。B、毫は細い毛。動物の毛は秋に殊に細くな

るので、きわめて微細なものを秋毫という。C、秋となって寒さのために極めて細小となった鳥獣の毛のさき。

かつて筆者は「見」字について論考した際、この結句について言及し、次の四つの例解を示した。

- イ、百里も遠くへ飛び去った鷹の羽の毛の先までも見える。
- ロ、百里先まで飛んでいった鷹そのものが秋毫のように見える。
- ハ、山上から眺めると周囲あくまで澄みきって、百里先の秋毫まで見ることが出来る。

ニ、その胡鷹は百里先にいるどんな小さな動物をも見つけてとびかかるのだ。

イ説はB・Cの解釈である。この場合、「秋毫」を作者が現時点で観ている白鷹の羽の毛先と考えているところに、そもそも筆者の疑問が生じた原因がある。間近でみても定かではないほど微細な羽毛。それをことあるうちに百里離れた(たとえそれが数百メートルの距離と仮定しても)、人間の目でみ分けられるであろうか。ある人はこれを次のように解釈してみせた。これは白鷹の鮮やかさ純白さを強調する象徴的表現である、と。しかし、それならば、すでに承句転句において十分すぎるほど直接的にまた象徴的に表現してはいないか。胡鷹、白錦毛、孤飛、片雪。

何かを強調するための象徴表現であるとした場合、もう一つ考えられるのは、作者ないし鷹匠の眼力のたしかさを述べようとしたものとする事である。百里かなたへ飛んでいっても私たちの眼は白鷹の純白の毛の先をみ分けられますよ——。(当時、望遠鏡はなかったのかしらという連想が働らくほど珍妙な訳となる。)

以上、イ説の非現実性・観念性を指摘する過程で、しかし、ニ説が想起されてきたのも事実である。眼力のたしかさをいうなら、それこそ「鷹の目」ということこそ正当ではないか。当然、「秋毫」は百里離れる

と極めて微細になるはずの兎や狐あるいは獲物にする鳥など小動物の類ということになる。我われのこの胡地産の鷹は優秀で、どんな遠くにいる獲物も見逃さず、さっととびかかってものにしますよと白鷹の眼力を贅えている句であると解釈するわけである。

結論から先に言えば、前記の拙論の中ではこのニ説を正解として論考を進めたのであるが、実は今回これを撤回し、ハ説に訂正したく思う。撤回すると言っても、イ説、ロ説に比べるとまだまだ捨てがたい解釈とみなしているわけで、今回はよりハ説の妥当性が増したという根拠を二三示すことにしたい。ハ説を支持するに至る思索の経緯および論理を以下順次述べることにする。

イ説の誤解は、まず結句を「百里 秋毫を見る」と訓読し、主語を作者(李白)に、目的語を「秋毫」にして、それを白鷹自体の羽毛にみたてたところに生じたものであった。またそれを誘発するもう一つの要因となったのが「見」字の意味のとり方にあると筆者は考えている。すなわち「見」をほとんど「看」と同じ意味で意識し解釈しているところである。その点はニ説の場合も同様である。主語を白鷹にとりかえ、「秋毫」を小動物の意味に解しているところはイ説と表面的に見解を異にしているが、「見」の意味のとり方についていえば両者は同じである。鷹が獲物を見る(発見する)。ところが「見(see)」字は本来そのような強い意志性を持たない語なのである。目を皿のようにしてみたり、眼光鋭く注視するという解釈とは縁遠い語義を持つ漢字なのである。従って、この両者が「看(look)」と変らぬ語釈をされる以上、妥当性が少いと判定されても仕方のないことである。結句は、「百里 秋毫見ゆ」と訓んで、百里四方にわたって秋毫ほどの微細なものまで自然に目に見え(ほど眺望がすばらしい)としなければならぬ。

今回ハ説に訂正する必要を感じた最大の理由は、杜甫の「山寺」と題する五律詩に同一表現句があり、やはり解釈も同一に揃えておくのがふさわしいと思つたことにある。

野寺残僧少	野寺	残僧 <small>まれば</small> 少なり、
山園細路高	山園	細路高し。
麝香眠石竹	麝香	は石竹に眠り、
鸚鵡啄金桃	鸚鵡	は金桃に啄む。
乱水通人過	乱水	通る人過 <small>よ</small> ぎり、
懸崖置屋牢	懸崖	屋を置きて牢なり。
上方重閣晚	上方	重閣 <small>くわん</small> の晚、
百里見秋毫	百里	秋毫見ゆ。

野寺すなわち詩題の山寺は秦州東南の麦積山上にあつた瑞応寺といふ。その寺ではもう残り少なくなつた僧侶がそれでも毎日の勤行怠りない。山園には羊腸の小道が高く続き、途中、麝香鹿が石竹のもとに眠り、鸚鵡が金桃を啄む山林風景は一種仙境の風趣がある。幾筋かの水が集まって流れる小さな滝のあたりを、誰か人が通り過ぎて行くのが見えた。懸崖に置かれた家は意外にしっかりとしている。山頂上方の重閣から眺めると、すでに夕暮であるにもかかわらず、百里遠方の秋毫が見透せるほどすばらしい眺めである。

結句の「百里見秋毫」は、山上の方丈に辿りついた作者がおそらくその一角にある重閣から展望したところ、すでに陽は西に傾いていたにもかかわらず、百里四方の微細なものが目に見えるほど眺望がすばらしいと象徴的に表現したものである。夕方の遠大な景観をうたい、壮大かつ清冽な気宇さえただよわせるいかにも杜甫らしい表現形式となつてい

といわねばなるまい。ここでは、この句は明らかに「見晴らしのすばらしさ」をうたったものと解する以外にはない。少なくとも鷹の羽毛とは何の関係もないこと論を俟たない。

そこでこの「四方を見渡せばどこまでもどこまでも見晴らしのきく雄大な景観である」という訳(ハ説)を李白の詩にあてはめて概観してみよう。李白はまず起句で「八月 辺風高し」と時期が秋の半ば(十月)頃であること、場所は国境のある岩山の山上(または中腹か)で、天高く澄みわたる秋空には雲一つなく、かなり強い風が吹きすすんでいる状況を述べている。次にそのような時候・地点・状況を承けて、自分たちの鷹狩用の鷹を紹介する。「胡鷹 白錦毛」鷹の中でもその優秀さを知られる胡地産の鷹は鮮やかな銀白色、錦の模様の羽をしている。その鷹が一たび放たれるときながら一片の雪の如く天空高く舞い上る。「孤飛す一片の雪」さてあらためて周囲を眺めると、さながら百里遠方の微細なものが目に見えるほど見晴らしのきくすばらしい景観である。

「百里 秋毫見ゆ」

前回ニ説を支持した時は、この結び方がいかにもテーマにそぐわないぎこちないものと感じられた。転句まで鷹狩の状況を描写したり鷹そのものの紹介をしたりしてきながら、結句に至って鷹についてはもう我関せずとばかり、腕組みしてまわりの景色にみとれる。テーマにもそぐわないし構成上も疎外感を拭いきれない。その点、李白は鷹狩を観察して、鷹匠の扱うこの胡鷹こそ、期待に違わずどんな遠方にいる獲物もめざとくみつけて襲いかかりますよと誇らしげに表現しているととらえるニ説の方が雰囲気的にもハ説を凌駕する。鷹の視力の鋭さと精悍な動きを目のあたりに見る思いがするではないか。

しかし、残念ながら、ニ説は次の二つの理由によつていわば独断的解釈にすぎないことが判る。一つは、「見」を即「発見」に解することの無理である。「見」が意志性の少ない「見る」という行為である以上、

「注視する」あるいは「察知する」という意志性の強い語に置き換えるわけにはいかない。二つ目の理由は、「觀放白鷹（二首）」と題するこの詩の二首目で、李白は再びこの胡鷹を詠んでいることである。

寒冬十二月 寒冬 十二月

蒼鷹八九毛 蒼鷹 八九毛

寄言燕雀莫相啁 言を寄す燕雀相啁すること莫かれ

自有雲霄万里高 自ら雲霄万里の高き有り

寒い冬の十二月の頃、はじめて捕えられた蒼鷹は八、九本の強い羽のくきを斬り取られ、遠拳颯去することができないようにされる。そこで燕や雀などの小鳥どもに言うておくが、決してこの蒼鷹を口やかましく嘲り笑うようなことをしてはならないぞ。やがて二年三年と経過して鷹狩用の立派な鷹に成長した暁には、自然、大空万里の高さまで飛翔し、あらゆる獲物を捕えて、その勇姿を呈することになるのだから。

表現形式は雑言古詩、毛・高が下平四の豪で押韻している。第一首で鷹狩の様子および周囲の景観をうたった作者は、この第二首でその鷹狩に使用する蒼鷹についてうたっている。荘子の大鵬図南を下敷にした大らかな作品であるが、ともかく、この二首目の補足に注意すれば、先の一首目の結句を強いて胡鷹描写にひきつけて考える必要はおのずとなくなるといえるだろう。以上のべてきたことから、多少の不満は残しつつもハ説を支持せざるを得ない理由が明白になったと思う。

最後に口説についてその当否如何を問われれば、次の詩をもって答えとしよう。杜甫の「孤雁」と題する五言律詩である。

孤雁不飲啄	孤雁 飲啄せず
飛鳴声念群	飛び鳴きて声群を念ふ
誰憐一片影	誰か憐れむ一片の影
相失万重雲	相失なふ万重の雲
望尽似猶見	望み尽くれども猶ほ見ゆるに似たり
哀多如更聞	哀しみ多くして更に聞ゆるが如し
野鷗無意緒	野鷗 意緒なし
鳴噪自紛紛	鳴噪して自ずから紛紛たり

もともと口説は「正解」を模索する過程で生じたいわば思いつきであった。イ説の、百里彼方に飛び去った鷹の羽の毛の先が肉眼で見ることが不可能とするならば、またたく間に百里も飛び去った鷹自体がスツと細い糸（秋毫）のように見えるという訳の方は、あながち不適切とは言えない。むしろ、そのスピード感といい軽快さといい李白らしさを体現しているときえ言える。文法的にも、「（我）―見―秋毫」という動賓構造として扱えば問題はない、と頭初一人で悦に入っていたものである。ところが喜こんだのも束の間、調べてみるとどうしても「見」を「……の、よ、う、に、見、え、る」と訳せる例文がみつからない。逆に否定的例として右の詩の五句目のように、「見、え、る、よ、う、だ」というのがみつかった。本来「……のようだ」という漢語は、像・似・猶・如・類などであり、「孤飛一片雲」のようにそれらの漢字を使わずに「恰も……のようだ」という意を表わす文章も多々ある。

右の詩、群・雲・聞・紛が上平十二の文の韻。群を離れた孤雁が仲間を求め鳴き渡る。遠くを眺め望んでももう見えるはずもないのに恰もまだ見えるが、如く、首をのびし、哀しげに鳴く様子はさながら仲間の呼ぶ声が聞こえるような風情である。（この望・見・聞については後述したい。）要するに「□□見○○」という構文を、「□□は（を）○○の、よ、う、だ」という漢語は、像・似・猶・如・類などであり、「孤飛一片雲」のようにそれらの漢字を使わずに「恰も……のようだ」という意を表わす文章も多々ある。

に見える(のように見える)と訳すことはまず不可能なことである。

二 「見」と「看」および「聞」と「聴」

「見」が意識性の薄い「みる」という行為を表わす語で、語感的には「有」に近いという証拠は次の詩から導き出される。

舍南舍北皆春水 舍南舍北 皆 春水
但見群鷗日日来 但だ見る群鷗の日日来たれるを

杜甫の「客至」と題する七律詩の起連である。二句目の「但見」の割注に「一作有」とあり、ここでは平仄の上でも(仄)、意味の上でも両者を取り換えて差支えないと考えられている。すなわち「見」と「有」の語義が近似するという所以である。但し、文法的に説明する場合、両者は動賓構造と処動構造(存現文形式)という厳然たる区別を持つ。例えば有名な陶淵明の「飲酒(其五)」の次の句において、「見」は限りなく「有」に近いが、「悠然として南山有り」として自己と南山を隔絶する方向ではなく、「悠然として南山見ゆ」としてあくまで自己と南山つまりは自然と微妙な関わり合いを持たせつつ、自然との一体感を表出しようとした陶淵明の意図を汲み取るべきなのである。

采菊東籬下 菊を采る東籬の下
悠然見南山 悠然として南山見ゆ

自然とのかかわり合いにおいて自己の意識を優位に立たせるのではなく、かといって単なる客観的描写に終らせるものでもない。その不即不離の関係を伝えて見事に読者に会得させるのに、この「見」字において他

にないといえはいい過ぎになるだろうか。自然との一体感に浸りながら、しかし完全に自然の中に埋没してしまうのではない。かすかに自己の存在意識の痕跡をとどめながら「見」字は禅的心境や一種独特の虚脱感を読む者に伝えてくれる。

空山不見人 空山 人見えず
但聞人語響 但だ人語の響くを聞くのみ

有名な王維の「鹿柴」の起承句である。「静」の詩人といわれる通り、全体的に禅的色調の濃い自然との融合を詠んだ作品が多いが、この句において「人有らず」とつき放してしまうのでもなく、まして「人を看ず」と主意性を持たせて自己存在を主張しようとするのでもない。森蔭に端坐する作者がふと思索をはなれて目をあげても、視界の届く範囲で人影がみあたらない。決して誰か人はいないかとあたりをキョロキョロみわたしているのではない。ただし、人声だけはポソポソとどこからともなく耳にはいつてくる(聞)。これまた何か物音の一つもしないかなと色気を出して耳を傾け聴こうとしているのではない。瞑想に耽りながら自然の中に溶け込んでいる作者の境地が如実に読む者の心にイメージされる。

李白の「黃鶴樓送孟浩然之広陵」の後半二句もそのように読むならば、また一段と作者の茫然自失・無我の境に湧き起る哀切の情を汲み取ることができよう。

孤帆遠影碧空尽 孤帆の遠影碧空に尽き
唯見長江天際流 唯だ見る長江の天際に流るるを

友人孟浩然の乗った帆船がはるかに水平線の彼方に没した。あとに残

された作者はなすすべもなくうつろに揚子江の流れに目をやっている。ただ、その心境は虚脱感を伴いながらも決してなげやりではない。これがもし「ただあとには長江が天のはてまで滔滔と流れて有るだけ」と表現してあれば、読者は作者の気持ちと自然との接点をみきわめられないばかりか、いささか自暴自棄気味の作者の心情を想像するかも知れない。しかしそうではなく、我われは見字のもつ意識性と無意識性の微妙なアヤの中に詩人の感情の襞を探りあて、惜別の情を追体験して永遠の共感を覚えるのである。

「見」字の語義がそのような性格を持つことの一つの証左は、上例でも散見できるように、「見」の修飾語としての副詞に「只」とか「但」「唯」など「ほんの少し、わずかに」の意味の語が使われていることがあげられる。すなわち、修飾語として「大いに」とか「非常に」など誇大表現の語が使われていないのである。「ただちょっと」とか「ほんの少し」という副詞が「見」字の語義の微妙さを規定し物語っているといえよう。

忽見陌頭楊柳色 忽ち見る陌頭 楊柳の色
悔教夫婿覓封侯 悔ゆらくは夫婿をして封侯を覓めしむるを
(王昌齡「閨怨」)

但見淚痕濕 但だ見る淚痕の湿れるを
不知心恨誰 知らず心に誰をか恨むを
(李白「怨情」)

朝日殘鶯伴妾啼 朝日 殘鶯を伴ひて啼き
開簾只見草萋萋 簾を開けば只だ見る草の萋萋たるを
(劉方平「代春怨」)

張明澄氏は、「忽見陌頭楊柳色」を、「ふと、あぜみちの柳の色を見て」と日本語訳し、現代中国白話文では「忽然看見田路上楊柳的顏色」と注釈している。また、「但見淚痕濕」についても、「目につくのは頬に涙のあと」と訳し、「看」は「自主的に見る」であり、「見」は「自然に目に入ること」であると説明している。

長安一相見 長安 一たび相見れば
呼我謫仙人 我を呼ぶ 謫仙人と
(李白「對酒憶賀監」)

兒童相見不相識 兒童相見るも相識らず
笑問客從何處來 笑ひて問ふ客何處より來たるやと
(賀知章「回鄉偶書」)

岐王宅里尋常見 岐王の宅里 尋常に見
崔九堂前幾度聞 崔九の堂前幾度か聞く
(杜甫「江南逢李龜年」)

若非群玉山頭見 若し群玉山頭にて見るに非ずんば
會向瑤台月下逢 會らず瑤台月下にて逢はん
(李白「清平調詞一」)

有時自發鐘磬響 時有りて自ら発す鐘磬の響
落日更見漁樵人 落日更ごも見る漁樵の人
(杜甫「崔氏東山草堂」)

